

邪馬台国の時代⑩

～卑弥呼と台与～

河村哲夫

天の岩戸の関係者



『図説古事記日本書紀』(西東社)より

前号において、卑弥呼は、247年3月24日(中国暦では正始8年2月1日)の日食を受けて、自死したか、殺害されたのではないかと述べた。

一方で、『古事記』『日本書紀』の「天の岩戸」は、日食と天照大神の死とおよび葬儀のイメージを伝えようとしているように見える。

『魏志倭人伝』は倭人の葬儀について、

「喪主は哭泣(こつきゅう)すれど、他人は就きて歌舞飲食す」

と書いているとおり、喪主は声を上げて泣くが、その他の人々は歌い踊り酒を飲む。

アメノウズメ(天宇受賣命)は、天の岩戸の前で淫らともいえる格好で踊った。

ここで、『古事記』『日本書紀』に基づく天の岩戸の関係者について紹介しよう。

天の岩戸の祭祀		出自	役割
祭祀の 挙行者	思金命(オモイカネ)	高皇産霊神の子	祭祀を主宰
	天児屋命(アメノコヤネ)	中臣氏の先祖	祝詞を唱える。
	天太玉命(アメノフトダマ)	高皇産霊神の子 忌部氏	櫛を捧げる。
	天手力男命(アメノタチカラオ)	高皇産霊神の孫 思金命の子	天の岩戸を引き開ける。
	天宇受賣命(アメノウズメ)	高皇産霊神の孫 天太玉命の子 猿田彦と結婚	歌舞を演じる。
5名			
祭具 製作	伊斯許理度売命(イシコリドメ)	天の糠戸命の子 鏡作氏の祖	八咫鏡を作る。
	玉祖命(タマノオヤ)	= 櫛明玉神 忌部氏	八咫瓊勾玉を作る。
	2名		

### 思金命

思金命(オモイカネ)は、『古事記』や『日本書紀』第七段一書一では、タカミムスビ(高皇産霊神)の子とされている。

その名のとおり、思慮深い人物であったのだろう。

子には、天表春命(あめのうわはる)・天下春命(あめのしたはる)という二人の兄弟がいて、『先代旧事本紀』によると、ニギハヤヒ(天孫降臨したニニギノミコトの兄弟)に随行して近畿に東遷し、天表春命は信乃阿智祝部(しなののあちのほうりべ)等の祖となり、天下春命は知々夫(ちちぶ)国造(くにのみやつこ)の祖となつたとされる。

天表春命は父の思金命とともに阿智神社(長野県下伊那郡阿智村)や戸隠神社(長野県長野市)などに祭られ、天下春命は小野神社(東京都多摩市・東京都府中市)などに祭られている。

### 天手力男命

天手力男命(アメノタチカラオ)は、『大和志料』(榛原町史編集委員会編・大正4年)に引用された『斎部氏家牒』(忌部正昂・大正4年)によると、天八意思兼命の子で阿智祝の遠祖であるとされる。その名のとおり、腕力の強い人物であったのだろう。

### 天太玉命

『古語拾遺』『新撰姓氏録』によると、これまたタカミムスビの子とされている。忌部氏(後に斎部氏)の祖である。『古事記』では布刀玉命、『日本書紀』では太玉命、

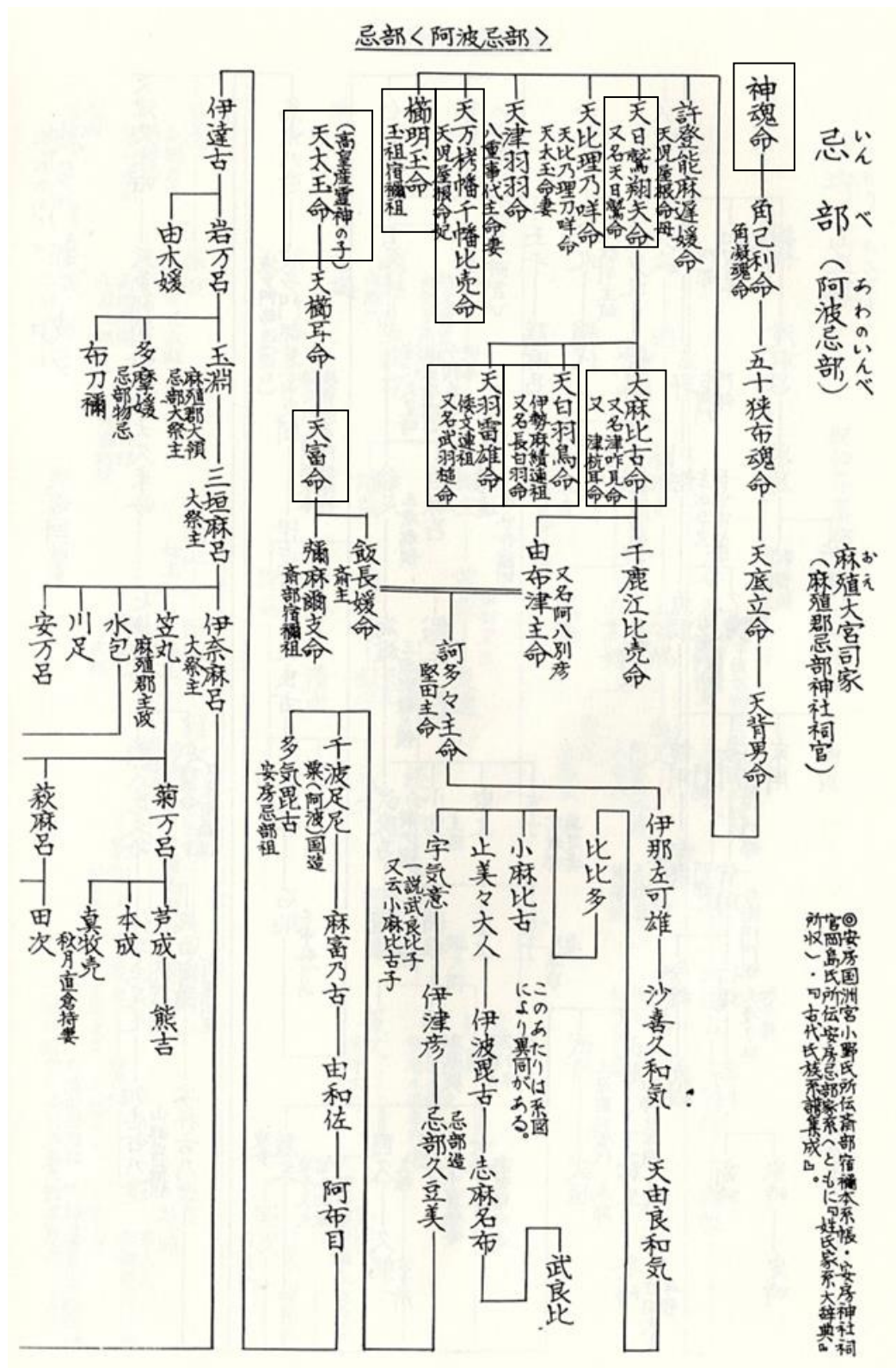
『古語拾遺』では天太玉命と書かれる。

『古事記』『日本書紀』においては、忌部一族から天の岩戸に参加したのは、櫛を持った天太玉命と、八尺瓊勾玉を造った玉祖氏(櫛明玉命)の二人だけとされているが、807年(大同2)に斎部(忌部)広成によって書かれた『古語拾遺』においては、二人のほか、下表のとおり、長白羽神・天日鷲神・津咋見神(大麻比古)・天羽槌雄神・天棚機姫神・手置帆負神・彦狭知神・天目一箇神などが、さまざまな祭具の製造に携わっている。

(なお、八咫鏡を製作したイシコリドメ(石凝姥命・伊斯許理度売命)については、『古事記』『日本書紀』『先代旧事本紀』によって補足修正している)

名	係累	末裔	天の岩戸での所掌
天太玉命	タカミムスビの子	中央忌部	櫛を捧げて天の岩戸に参加。
天太玉命神社(奈良県橿原市)			
<b>以下の者は、祭具を製作</b>			
長白羽神	天日鷲命の子	伊勢の神麻統部 (かんおみはたべ)	麻から青和幣(にきて)を織る。
	・伊勢松阪には、絹や麻を織る服部神部の人々に由来する下御糸・上御糸・中麻績・機殿・服部などの地名がある。 ・神服織機殿(かんはとりはたどの)神社・神麻統機殿(かんをみはたどの)神社(松阪市)		
天日鷲神	神皇産霊尊系	阿波忌部 安房忌部	穀木(カジノキ)から木綿(ゆう)の白和幣を織る。
津咋見神 (大麻比古)	天日鷲命の子 長白羽命の兄弟	阿波忌部は踐祚大嘗祭に鹿服(麻織物)を貢進する役目があり現在も続く。 なお天太玉命の孫の天富命は四国の阿波忌部を率いて房総半島に渡り、故郷にちなんで「安房」と名づけ、天太玉命を祭る神社を建てたという。 →安房忌部→安房神社(千葉県館山市大神宮)	
天羽槌雄神	天日鷲命の子	倭文氏(しとり)	文布(あや)を織る。
	大和国・河内国・摂津国で活動(『新撰姓氏録』)		
天棚機姫神	天八千千比売命・天衣織女命という別名あり。	天児屋根命の妃か	神衣(和衣)を織る。
	「倭姫命世記」は天棚機姫神を天八千千比売命の祖母とする。忌部氏系図では天万栴幡千幡比売命と記され、栴幡千千姫命(万幡豊秋津師比売命)とよく似ているが、天児屋根命の妃と注記されているので別人とみられる。		
櫛明玉命 (玉祖氏)	天日鷲命と兄弟 玉祖氏の祖	出雲忌部の祖	八尺瓊勾玉を作る。
	玉作湯神社(島根県松江市)		
石凝姥命 (伊斯許理度売命)	天の糠戸命の子	鏡作氏の祖	八咫鏡を作る。
手置帆負神	神皇産霊尊・天道根命系 子は彦狭知神	讃岐忌部	天御量(あまのみはかり)で木を伐り彦狭知命と天照大神の瑞殿を造営し、御笠・矛・盾を作った。
彦狭知神	神皇産霊尊・天道根命系 父は手置帆負神	紀伊忌部	
天目一箇神	天津彦根命(天照大神の三男)の子か	筑紫忌部 伊勢忌部	刀斧・鉄鐸を作る。
	天目一箇命をニギハヤヒと東遷した天津麻羅(アマツマラ)とみる説あり 天津麻羅(アマツマラ)は笠縫等の祖(先代旧事本紀)		

なお、近藤敏喬氏作成の『古代豪族系図集覧』（東京堂出版）の忌部(阿波忌部)氏系図を以下に掲載しておこう。なお、本文と漢字表記が異なるのは、出典の差異に基づく。



忌部<安房忌部>(杉山)

いん 部 (安房忌部)

安房神社祠官家  
洲宮神主家

◎安房洲宮小野氏所伝者部譜本系帳・安房神社祠官圖古  
氏所伝安房忌部家系へとも姓氏家系大綱異所収可古  
代氏族系譜集成・戸倉英太郎曰杉山神社考

神魂命

天日鷲翔矢命

大麻比古命

由布津主命

\*

天由良和氣

比比多

\*省略部分は別掲の「阿波忌部」系図で記した。

小麻比古

このあたりは系図により異同がある。

止美々大人

伊波毘古

志麻名布

武良比

宇氣意  
又云小麻比古子

伊津彦

忌部久豆美

波志主

千波足尼  
阿波忌部祖

見都万侶

由岐万侶

伊久毘古

理岐万侶

名美磨

止保志

多氣毘古

岐久和氣

多岐雄

久米麻呂

勝麻呂

興麻呂

義嗣

義生

義繁

義胤

義和

義康

家和和氣

勝栄

義任

勝世

成義

繁生

慶方

義総

義里

湯義方呂

白鳳39依神託奉齋高木

神武蔵國都筑郡杉山岡

養老497秋卒86

臣麻呂

忍國

鷹美

有世

勝仲

海生

藤雄

上貞朝行9十

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國夏

公並

杉山

太環大夫

康平年中興州

有軍功

合戦従源頼義

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國夏

公並

杉山

太環大夫

康平年中興州

有軍功

合戦従源頼義

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國夏

公並

杉山

太環大夫

康平年中興州

有軍功

合戦従源頼義

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國夏

公並

杉山

太環大夫

康平年中興州

有軍功

合戦従源頼義

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

藤雄

藤神社奉遷

貞登郡

國彦

公正

總春

春彦

豊仲

勝仲

權少孫

親広  
下野權介

伯麻呂  
齊衡3於金流磯崎  
本見少彦名命

乙勝  
真道

\*杉山神社考  
に「湯義方呂」と  
大室2年卒と  
し、その子義  
呂(天平字7  
年卒)以下の系  
図がある。しか  
し初代義麻呂  
らまで歴代同  
名で本末の辨  
載がなく、二十  
八代(永2年卒)  
明へ迄永2年卒  
とあり、以後義  
光・義清と統  
いて、義保まで  
掲げられている。

湯義方呂  
白鳳39依神託奉齋高木  
神武蔵國都筑郡杉山岡  
養老497秋卒86  
(武蔵國杉山神社祝部祖)  
(杉山神社の祝部は杉山氏の  
ち北村氏も稱したという。)

臣麻呂  
忍國  
鷹美  
有世  
(常陸國千勝神社祠官杉山氏系)  
大同42遷住  
常陸國鹿島郡  
千勝神社祝部

勝仲  
海生  
伯麻呂  
齊衡3於金流磯崎  
本見少彦名命

乙勝  
真道



## アメノウズメ (天宇受賣命)

次にアメノウズメである。天太玉命の娘であるから、タカミムスビの孫にあたる。

『古事記』では天宇受賣命、『日本書紀』では天鈿女命と書かれる。

逆さに置いた桶の上に乗って、胸乳も露わに、裳の紐を女陰まで垂らして足を踏み鳴らし、情熱的に踊って八百万の神を大喜びさせた。

『古語拾遺』には、「古語に、アメノウズメ (天乃於須女) といふ。その神、強く悍 (あらく猛 (たけ) く固し、故以て名と為 (す)。今の俗 (よ) に、強き女をオズシ (於須志) と謂ふは、この縁 (ことのもと) なり」と書かれている。

卑弥呼は、前に紹介したように、『魏志倭人伝』によれば、

「王となりてより以来、見 (けん) 有る者少し。婢千人を以 (もち) ひ、自ずから侍る。ただ、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝へ、居所に出入りす。宮室、楼観の城柵は厳く設け、常に人有りて、兵を持ち守衛す」

と、女王即位後、人々から見られることを極力避け、侍女 1,000 人に囲まれて暮らしていた。

侍女千人は、基本的に未婚の女性だったはずである。既婚の女性は子どもと家族を世話する必要があり、卑弥呼とともに暮らすことはできないであろう。

したがって、卑弥呼のいる拠点的集落は、卑弥呼を中心に 1,000 人の未婚の女性たちが暮らす女王国であったといえる。5 人単位でも 200 のグループができる。

ギリシャ神話の「アマゾネス」のような女性兵も編成されていたかもしれない。

武器で戦うだけではなく、歌や踊りを交えた呪術によって敵兵を幻惑する女性たちもいたであろう。

強い女 (オズメ) で、歌って踊れる女性といえ、アメノウズメ (天宇受賣命) である。

天照大神に仕えていた多くの女性たちの代表として、天の岩戸の祭祀に参加したのがアメノウズメ (天宇受賣命) であった可能性は十分に考えられよう。

なお、猿田彦との関連については、ずっと先のほうで述べる。

## 天児屋命

最後に、アメノコヤネ (天児屋命) である。

『日本書紀』には、「中臣連の遠祖」とされている。

『新撰姓氏録』によると、父は興台産霊命 (こごとむすび・居々登魂命) とされ、『古語拾遺』では津速産霊神 (つはやむすび・津速魂命) とされ、母は安国玉主命の娘の許等能麻知媛命 (ことのまちひめ) とされている。

先に紹介した忌部氏系図では、母の名は許登能麻遲媛命 (ことのまちひめ) とされているから『古語拾遺』と完全に一致する。

ただし、父の名については『新撰姓氏録』には安国玉主命と記され、忌部氏系図には天背男命と記されている。両者が同一人物であるかどうかはわからない。

『古事記』『日本書紀』をみても、中臣氏が天兒屋根命を祖としていることはわかるが、天兒屋根命の祖については何も記されてはいない。

ところが、『続日本紀』天応元(781)年7月の条に、中臣氏の遠い先祖は「天御中主命」と記されている。

七月十六日 右京の人、正六位上の栗原くりはらのすぐりこきみ勝子公が次のように言上した。  
「子公らの先祖の伊賀都臣いかつおみは、中臣氏の遠い祖先に当る天御中主命あめのみなかぬしのみことの二十世の孫で意美おみ佐夜麻さやまの子であります。伊賀都臣いかつおみが神功皇后じんこうこうごうの御世に百済に使いしました時に、百済の女性めとを娶めとつて二人の男子を生みました。その名を本大臣もとのおおおみ・小大臣おのおおみといいます。後に彼らは遙か本来の血筋をたずねて、わが朝廷に帰化しました時、美濃国不破郡栗原たろい(不破郡垂井町か)に土地を賜わって居住しました。その後、居住地の名によって氏を拜命し、ついに『栗原勝くりはらのすぐり』の氏姓を負うようになりました。どうか先祖の關係で『中臣栗原連なかとみのくりはら』の氏姓を賜わりますよう、伏してお願い申し上げます」と。  
そこで、子公ら男女十八人に願ひ通りに改めて「中臣栗原連」の氏姓を賜わった。

これまた、近藤敏喬氏の『古代豪族系図集覧』(東京堂出版)に掲載された中臣氏系図では次のとおりとされている。





# 神統譜

## 天神系

天御中主神  
天御中主尊  
国常立尊

天八下尊 — 天三下尊 — 天合尊 — 天八百日尊 — 天八百万魂尊 — 津速魂命 — 市千魂命

居々登魂命  
興登魂命

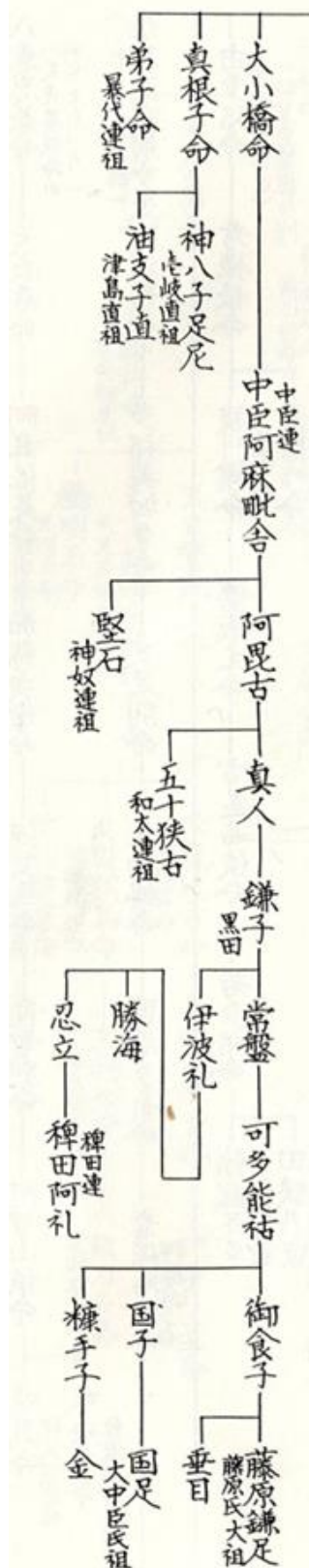
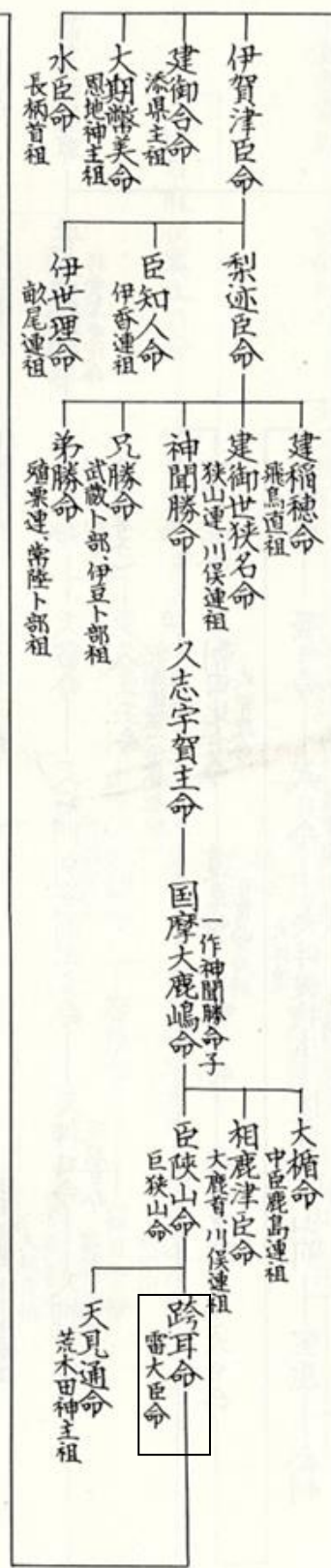
天兒屋根命

天押雲命  
天忍雲根命

天多彌伎命  
天種子命

宇依津臣命 — 御食津臣命

### 神統譜〈天神系〉



◎古事記・日本書紀・新撰姓氏錄・先代四事本紀・系圖纂要・大田亮曰姓氏家系譜書曰姓氏家系大辭典・菅原助曰雲上御系譜曰・室賀壽男曰古代氏族系譜集成

この「神統譜」と『先代旧事本紀』に記されたタカミムスビ(高皇産靈尊)の系譜を比較してみよう。

	『先代旧事本紀』 タカミムスビ(高皇産靈尊)	神統譜<天神系> 中臣氏の系譜	
1	天御中主神		
2	天八下尊(アメノヤモリ) (浮経野豊買尊・豊鬘別尊)		
3	天三降尊(アメノミクダリ)		
4	天合尊(アメノアワス)(天鏡尊)		
5	天八百日尊(ヤオヒ)		
6	天八十万魂尊(ヤソヨロズ) ..... 天八百万魂尊(ヤオヨロズ)		
7	タカミムスビ (高皇産靈尊・高魂神・高木命)	カミムスビ (神皇産靈命)	ツハヤムスビ (津速魂命・津速産靈命)
8	天思兼命(阿智の祝部の祖) 天太玉命(忌部首の祖) 天忍日命(神狭日命・大伴連の祖) 天神立命(山代の古我直の祖)	御食持命(紀伊直等の祖) 天道根命(川瀬造の祖) 天神玉命(葛野鴨県主等の祖) 生魂命(猪使連等の祖)	市千魂命(市千産靈命) 興登魂命 天児屋根命
備考	このほか以下の子などがいる。 ・万幡豊秋津師比売命 (天忍穗耳命の妃、ニニギの母) ・三穗津姫(大国主命の後) ・天日神命(津島県直の祖) ・天月神命(壱岐県主の祖) ・少彦名命(大国主命に協力) (『古事記』は神産巢日神の子、 『日本書紀』は高皇産靈神の子とする)	このほか以下の子などがいる。 ・鬘貝比売(キサガイヒメ) ・蛤貝比売(ウムガイヒメ) 二人は大国主を治療し生き返らせる。 ・角凝魂命(ツノコリムスビ) 子はニギハヤヒと東遷した伊佐布魂命	・天児屋根命の子は天押雲命 ・孫は中臣種子 中臣種子は神武東遷に随伴し、宇佐津媛を妻とする。

※高皇産靈尊と神皇産靈命との関係ははっきりしないが、ほぼ同時代的に活動していることや、子孫の系譜も異なることから、親子でも夫婦でもなく、兄弟とみなして整理した。

※天八十万魂尊(ヤソヨロズタマ)と天八百万魂尊(ヤオヨロズ)は、漢字表記は異なるが、日本語の発音では同一人物とみてよろしかろう。

※この結果、タカミムスビ(高皇産靈尊)・カミムスビ(神皇産靈命)・ツハヤムスビ(津速魂命)の3人(3兄弟)が「ムスビ」を共有し、天の岩戸に関与した天思兼命と天太玉命、天児屋根命がおなじ世代となったので、整合性が取れたのではないかとみている。

※なお、『古代豪族系図集覧』の中臣氏の系譜では、市千魂命(市千産靈命)→興登魂命→天児屋根命は親子の縦系列で結ばれているが、『先代旧事本紀』では3兄弟とみている。

### 天の岩戸とタカミムスビ

以上の検討を踏まえて、もう一度、天の岩戸の関係者に話を戻そう。

タカミムスビ(高皇産靈神)の子は思金命(オモイカネ)と天太玉命(アメノフトダマ)の2

人、孫は天手力男命(アメノタチカラオ)と天宇受賣命(アメノウズメ)の2人、そして残る1人の天児屋命(アメノコヤネ)は、タカミムスビの甥にあたる。

天の岩戸の祭祀の参加者とタカミムスビ(高皇産靈神)との関係

天の岩戸の祭祀	タカミムスビとの関係 (□が本人)	役割
思金命(オモイカネ)	父・□子	祭祀を主宰
天児屋命(アメノコヤネ) (中臣氏の先祖)	叔父・□甥	祝詞を唱える。
天太玉命(アメノフトダマ) (忌部氏)	父・□子	櫛を捧げる。
天手力男命(アメノタチカラオ) (思金命の子)	祖父・□孫	天の岩戸を引き開ける。
天宇受賣命(アメノウズメ) (天太玉命の子) (のち猿田彦と結婚→猿女氏)	祖父・□孫	歌舞を演じる。
5名		

何と、全員がタカミムスビ(高皇産靈神)の近親血族ではないか。

傍系血族としては甥の天児屋命(アメノコヤネ)のみで、あとの4人はすべて子か孫という直系血族である。

要するに、天の岩戸の本質は、タカミムスビ(高皇産靈神)一門による独占的な催事という点にある。

天照大神には、息子とされる天忍穗耳命・天穗日命・天津彦根命・活津彦根命・熊野久須毘命の五人兄弟がいて、娘とされる宗像三女神がいた。

しかしながら、彼らは天の岩戸の祭祀から排除されている。

天照大神は、日食とともに、不審な死を遂げた。首謀者はタカミムスビ(高皇産靈尊)であろう。思金命(オモイカネ)・天児屋命(アメノコヤネ)・天太玉命(アメノフトダマ)・天手力男命(アメノタチカラオ)・天宇受賣命(アメノウズメ)の5人組も何らか形で関与していたであろう。天宇受賣命(アメノウズメ)に至っては、天照大神の身边に仕えた責任者の一人であった可能性すらあり得よう。

そして、天照大神の後継者となったのは、タカミムスビの娘の万幡豊秋津師比売命(よろずはたとよあきづしひめ)である。

『古事記』では万幡豊秋津師比売命、『日本書紀』本文では栲幡千千姫、一書では栲幡千千媛万媛命(たくはたちぢひめよろづひめのみこと)、天万栲幡媛命(あめのよろづたくはたひめのみこと)、栲幡千幡姫命(たくはたちはたひめのみこと)、火之戸幡姫児千千姫命(ほのとばたひめこぢひめのみこと)などと表記されているが、「栲幡(たくはた)」という共通名からみて、織物に長けた乙女であったのだろう。

想像たくましく考えれば、天手力男命(アメノタチカラオ)によって天の岩戸から引っ張

り出されたのは万幡豊秋津師比売命であったかもしれない。

「日食→天照大神の死→葬儀」という流れで進んでいた天の岩戸の祭祀が、突然、新しい女神の「即位の儀式」に大転換する。

そのうえ、新しい女神は、天照大神の息子の天忍穗耳命と結婚する。

日が没し、日がまた昇る——堯から舜への禪譲であるかのごとき見事な演出である。

祭祀を企画し、シナリオをつくったタカミムスビ(高皇産靈尊)とオモイカネ(思金命)は、ただ者ではない。

安本美典氏の分析によると、天の岩戸以降、天照大神が単独で行動することはほとんどなくなり、タカミムスビ(高皇産靈尊)が最高主権者的に行動することが多くなるという。

表5 『古事記』における最高主権者的存在の変化

	天の岩屋事件以前	天の岩屋事件よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	16	6	22
高御産巢日の神とペアで行動	0	7	7
高御産巢日の神だけが最高主権者的に行動	0	2	2
計	16	15	31

●テキストは、日本古典文学大系『古事記 祝詞』(岩波書店刊)による。

表6 『日本書紀』における最高主権者的存在の変化

	天の岩屋事件以前	天の岩屋事件よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	18	1	19
高御産巢日の神だけが最高主権者的に行動	0	12	12
計	18	13	31

そして、婿の天忍穗耳命は「出雲の国譲り」「日向への天孫降臨」などに際して、ことごとく消極的な姿勢をしめして、影の薄い存在に落ちぶれてしまう。

さらには、天照大神に対して、乱暴狼藉を働いたスサノオも高天原から追放されている。これまた、タカミムスビ(高皇産靈尊)一派の粛清によるものであろう。

何度もいうように、卑弥呼の後継者は「台与(とよ)」という。天照大神の後継者となった万幡豊秋津師比売命はあるいは豊日雲(とよひるめ)という。「とよ」が共通している。投馬国も、投与国——つまり豊(とよ)の国と読める。

すなわち、卑弥呼=天照大神の死後、邪馬台国ないし古代神話の舞台が、筑紫平野から九州の東側——豊前・豊後方面に移ったことを示唆している。

### 帯方郡太守の王頎(おうき)

『魏志倭人伝』にもどろう。

卑弥呼は 247 年(正始八)に死去している。西暦で 3 月 24 日(中国暦では 2 月 1 日)に日食が起きている。前号において、卑弥呼はこの日食を受けて、自死したか、殺害された可能性が高いと述べたので、おのずから卑弥呼の死亡日時が 3 月 24 日(中国暦では 2 月 1 日)の夜半ごろと推察されよう。

すでに紹介したように、『魏志倭人伝』には、

「其の八年(正始八年・247)、(帯方郡)太守王頎(おうき)、官に到る(着任した)。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯(さし)・烏越(あお)等を遣わして郡に詣(いた)り、相(あい)攻撃する状(さま)を説く。塞(さい)の曹掾史張政(ちょうせい)等を遣わし、因りて詔書・黄幢(こうどう)を齎(もたら)し、難升米(なしめ)に拜受せしめ、檄(げき)を為(つく)りて之に告諭(こくゆ)せしむ。卑弥呼以(もつ)て死す。大いに冢(つか)を作る。径百余歩なり。殉葬する者奴婢(ぬひ) 百余人なり」

と書かれている。

辰韓八か国の楽浪郡への編入をめぐる交渉のなかで、通訳がつい誤訳してしまった。激高した辰韓の臣智(王)たちが反乱を起こした。楽浪太守の劉茂と帯方郡太守の弓遵は兵を率いて辰韓に赴き、鎮圧に成功したものの弓遵は戦死してしまった。正始七年(246)のことである。具体的な月日はわからない。

その後任として帯方郡太守に任命されたのが、玄菟郡太守であった王頎(おうき)である。

弓遵が戦死した年を正始六年(245)とする説もみかけるが、韓諸国の最前線に位置する帯方郡の太守を 1 年以上も空白にすることはなかろう。

王頎は正始七年(246)のうちに内示を受け、正始八年(247)の正月には着任していたはずである。

その直後に卑弥呼の使者たちが帯方郡に到着した。

使者の名は、載斯(さし)・烏越(あお)という。

邪馬台国と狗奴国が戦闘状態となった報告を受けた帯方郡太守王頎は、塞の曹掾史(磐の守備隊長)張政以下を倭国に派遣することを決定し、併せて詔書と黄幢(こうどう・軍旗)を預けた。

この詔書と黄幢は、2 年前の 245 年(正始六)に洛陽の皇帝から邪馬台国の大夫の難升米(なしめ)に渡すよう命じられていたものである。

難升米とは、卑弥呼が 239 年(景初三)にはじめて中国に派遣した使者である。

黄幢は軍旗であり、いわば錦の御旗である。それを授けられた難升米は、いわば魏の皇帝勅任の將軍である。魏は難升米を邪馬台国の代表者のごとく遇している。

難升米とはいったい何者なのか。

それはともかくとして、倭国への派遣を命じられた張政は、卑弥呼が差し向けた載斯・

烏越らとともに帯方郡を出発した。

載斯・烏越らが帯方郡に到着したのが 1 月 10 日(中国暦)前後とみて、帯方郡から伊都国まで船で 10 日程度、伊都国から邪馬台国までどんなに急いでも数日はかかる。したがって、遅くとも 1 月 15 日ごろまでには出発したはずである。

そうでないと、卑弥呼が死んだとみられる 2 月 1 日の日食の日には間に合わない。

### 張政らの到着と卑弥呼の死

張政を隊長とする帯方軍の編成規模についてはまったく情報がないが、戦闘状態に突入している二つの国を調停するのに、10 数名の兵ということはないはずである。

この時代の外洋船として、長さ 20 メートル前後、艀の数が片舷で 20 前後の規模の大型帆船が造られていたことは確認されている。たとえば、呉の孫権が東南アジアに派遣した船は、7 枚の帆を張り、600～700 名の乗員を乗せていたといわれる。

帯方郡がそのような大型外洋船を保有していたという記録は見当たらないが、帯方郡と山東半島を往復する程度の船舶を保有していたことは明らかである。

景初二年(238)9 月の司馬懿による遼東の公孫氏討伐を受けて魏の明帝は楽浪郡と帯方郡の支配権を奪取した。『魏志韓伝』には次のとおり書かれている。

「魏の景初年中(237～239)、明帝は密かに帯方太守劉昕(りゅうきん)と楽浪太守鮮于嗣(せんうし)を派遣して、海を渡って帯方・楽浪の二郡を平定させた」

船員数や乗員数などの規模については記録されていないが、黄海を渡れる程度の船舶を帯方郡が保有していたことは明らかである。

倭国へ向かう船舶の乗員数等については推測するしか方法はないが、仮に 1 隻あたり船員・兵士 50 名として、2 隻で 100 名、3 隻で 150 名となる。うち兵士を 100 名程度とみれば、最低でも 3 隻体制で倭国に向かったことになる。

倭人船の水先案内を受けながら、1 月 15 日に出発したとして、1 月 25 日ごろ伊都国に到着し、船員ら 50 名を残して、張政以下 100 名ほどの兵で邪馬台国と狗奴国が軍事衝突している最前線の筑紫(筑前・筑後)と肥前の境界線あたりまで駆けつけるのに約 2 日とみれば、1 月 27 日ごろ到着したことになる。卑弥呼が死去するわずか 3 日前である。

張政は現地で邪馬台国軍を指揮している難升米と対面し、詔書と黄幢(こうどう)を手渡して激励したであろう。

そして、張政は狗奴国軍とも接触し、おそらく狗古智(くこち)卑狗に対して、停戦を促したであろう。

そういう慌ただしいなかで、2 月 1 日(中国暦)を迎え、その夕刻に日食が起きたのである。そして、卑弥呼は「以て死す」である。

死因は書かれていないが、前後の文脈から、張政らが停戦に向けて慌ただしい調停工作を行っていたその最中であつたことはわかる。

西暦では 3 月 24 日。安本美典氏によると、日食の時間は 17 時 24 分から 18 時 27 分ま

で。この時期の福岡地方の日没は、18時30分ごろである。

皆既日食ではなかったにせよ、ほとんど真っ暗になった太陽が西の海上に沈んでいったのである。世界が突然暗くなった。

2月1日は朔であるから、月も見えない。恐怖の夜になった。

老いた卑弥呼は、進退に窮した。

太陽を守る霊力が失せたのは明らかであった。

### 難升米とタカミムスビ(高皇産霊神)

難升米は、奴の升米(しめ)とも読める。

「大胆に推測すれば、奴国の王族出身でありながら、邪馬台国の中枢で活躍していた人物であったかもしれない」と述べた(「卑弥呼の外交②」古代史ネット7号)が、森本幹彦(福岡市博物館学芸課)も『新・奴国展』所収の「卑弥呼と難升米」のなかで、次のように述べられている。

ところで、「魏志倭人伝」には卑弥呼とともに、注目した人物がいる。卑弥呼に派遣されて、魏の都洛陽まで行った難升米という人物だ。この魏への派遣は、帯方郡・楽浪郡を支配していた公孫氏が魏によって滅ぼされるタイミングだ。魏とはじめて接触する大役に抜擢された人物で、外交に優れた倭国の要人であろう。記録にはないが、公孫氏の時代から大陸との外交・交易を担っていたに違いない。その大役を無事果たし、卑弥呼は親魏倭王に、自身も率善中郎将の印綬を受けた。

さらに後年、倭国を代表して詔書と黄幢を魏から受けているのは、倭国の軍事的代表者でもあったからであろう。後で魏に派遣される別の人物たちもそうであるが、彼らは邪馬台国人とは限らない。当時の倭国は邪馬台国を盟主としながらも実力的にはそれに勝るとも劣らない国々が連合している状況と考えられるので、連合国の王が倭国を代表して使者に立っている可能性は高い。

難升米の難の字は難に通じる音であるが、奴国が『日本書紀』にみえる難泉の地に比定されているように、奴国出身の有力者ではないかという興味深い指摘がある。難升米に関わる記録からうかがえる外交力や軍事力に優れた人物像と、次に解説する三世紀の奴国が果たした役割は重なるところがある。

タカミムスビ(高皇産霊神)もまた、天御中主命の末裔である。すでに述べたとおり、天照大神は本系で、タカミムスビは傍系である。

この長い連載は、『魏志倭人伝』など中国側の文献情報と『古事記』『日本書紀』など日本側の文献情報が、パラレルな関係にあるのではないかという仮説を検証するために開始したといっても過言ではない。

その観点から、漢の倭の奴の国王=天御中主命、卑弥呼=天照大神、台与=万幡豊秋津



師比売命については、かなり高いレベルでの同一性が認められるのではないかとおもっている。

これ以外の人物はどうか。たとえば次の2人である。

○難升米(ナシメ)

○タカミムスビ(高皇産霊神・高御産巢日神)

難升米(ナシメ)は魏から倭国の代表とみられ、タカミムスビは天の岩戸に際してその一族とともに決定的な役割を演じた。

しかしながら、二人の名には、一見して共通性が感じられない。

やはりだめか——とあきらめかけたが、よくよくみると、「難と産」、「升と巢」、「米と日」がそれぞれ対応しているようではないか。

やや強引ではあるが、

○難升米(なしめ) = 「ナン・ショウ・ベイ」 → 「ナン・シ・ベ」 → 「ナム・ス・ビ」

○産巢日(むすび) = 「サン・ス・ビ」 → 「サム・ス・ビ」

と読めないでもない。

よって、難升米=タカミムスビ(高皇産霊神・高御産巢日神)である。

BINGO!!

と踊りたくなったが、無駄な言葉遊びはやめろ、という声が聞こえてきそうである。

『魏志倭人伝』にはこれ以外にも魏に派遣された使者などの倭人名が記載されているので、以下の表を作成した。

脈ありと感じるか、脈なしと感じるかは人それぞれであろうが、少なくとも、こうして日中の文献情報を比較のために並べることがまず基本の作業であろう。

#### 魏に派遣された使者

『魏志倭人伝』	『日本書紀』『古事記』等
大夫の難升米(ナム・ス・ビ)	高皇産霊神(ム・ス・ビ)か。
都市牟利(ツシゴリ)	八咫鏡を作った伊斯許理度売命(イシヨリドメ・石凝姥命)か。またはカミムスビの子の角凝魂命(ツノヨリ)か。
大夫の伊声耆(イシキ)	?
掖邪狗(ヤヤコ)	?
載斯(サシ)	彦狭知神(ヒコサシリ)と似ている。 (忌部一族。天の岩戸の際に手置帆負神とともに天御量(あめのみはかり)を使って木材を集め、瑞殿(みずのみあらか)を造営)
烏越(アオ)	? (景行天皇時代、豊後に青(あお)という土蜘蛛がいた)

各国の役職者等

	『魏志倭人伝』	『日本書紀』『古事記』
対馬国	卑狗(ひこ)	日子=彦
	卑奴母離	日守
壹岐国	卑狗	日子=彦
	卑奴母離	日守
伊都国	爾支(にぎ)	禰宜(ねぎ)、ニニギ・ニギハヤヒと似ている。
	泄謨觚(せまこ)	島子・島彦(志摩)
	柄渠觚(へここ)	日子子=彦子
	一大率	のちの大率帥と似ている。
奴国	咒馬觚(しまこ)	島子・島彦(志賀島・能古島など)
	卑奴母離	日守
不弥国	多模(たま)	玉(豊玉彦など人名に使われることあり)
	卑奴母離	日守
邪馬台国	伊支馬(いきま)	活津彦根命(いくつひこね・天照大神の四男)とやや似ている。
	弥馬升(みまと)	御体処(みまと)
	弥馬獲支(みまわき)	御体傍(みまわき)
	奴佳鞮(なかて)	中臣(なかとみ)あるいは天の糠戸(ぬかど)命(八咫鏡を作った伊斯許理度売命の父)と似ている。
投馬国	弥弥(みみ)	耳・天忍穗耳命(天照大神の子)・手研耳命(神武天皇の兄・日向)
	弥弥那利(みみなり)	耳垂(みみたり) (景行天皇時代、豊前に土蜘蛛の耳垂がいた)
狗奴国	卑弥弓呼(ひみここ)	彦王(ひこみこ)か
	狗古智卑狗(くこち)	菊池彦(きくちひこ)と似ている。

男王立つ

卑弥呼は、247年の中国暦では2月1日、西暦では3月24日の夜半に、自死か他殺によって没した(とみられる)。

帯方郡の塞の曹掾史(砦の守備隊長)張政は、ただちに難升米=タカミムスビに対して狗奴国との戦闘停止を要請し、狗奴国に対しても同様の要請を行ったにちがいない。

難升米は、重臣・関係者らを招集して、卑弥呼の死を告げるとともに、服喪・葬儀・墳墓など、今後の対応について——神話風にいえば、「八百万の神々と天の安河の河原に集まり評議をおこなった」。

そのまとまった結果を知らせるため、対馬・壹岐・末盧国・伊都国・奴国・不弥国・投馬国など邪馬台国傘下のクニグニに対して急使を派遣したであろう。

もちろん、服喪期間中であっても、後継者の選定作業や墳墓の築造などについても同時並行的に進められていたにちがいない。

墳墓については、卑弥呼の生存中に「寿陵墓(じゅりょうぼ)」が造られていた可能性もあるが、実際に卑弥呼の死に直面すると、あちこち調整を図る必要性が生じるのは当然

のことである。

まして、径百余歩(直径140~150メートル)の規模であれば、外装をきちんと整えるだけでも相当な期日を要するであろう。さらには、殉死した奴婢100人のための殉死墓も新たに整備する必要があるだろう。

そのようななか、「男王立つも、國中服せず」という事態が勃発したのである。

『魏志倭人伝』にはその男王の名は書かれていないが、『古事記』『日本書紀』では天照大神を天岩戸に追い詰めたスサノオの可能性が最も高い。

天照大神とスサノオは、腹違いの姉弟であったとみている(「古代史ネット」第5号(2021年12月))。

男王は勝手に即位を宣言したのか、國中が大騒ぎになった。

『魏志倭人伝』によれば、

「男王立つも、國中服せず。更に相誅殺す。当時千余人を殺す」

という内乱状態に陥ったが、結局、男王は王位をはく奪されている。

『古事記』『日本書紀』によれば、スサノオは全財産を没収され、高天原から追放されている。

ひょっとしたら、男王は卑弥呼とおなじく、248年9月5日(中国暦では8月1日)の日食を口実に、王位を追われたのかもしれない。

死を免れたのは、午前5時57分から7時6分までの明け方近くの日食で、その後は回復したためか――。

## 台与即位

男王のあとに、新たな女王が誕生した。

『魏志倭人伝』は、

「また卑弥呼の宗女台与(原文は壹与)、年十三なるものを立てて王と為す。國中遂に定まる。(張)政等、檄を以て台与に告諭す」

と書く。

宗女とは、卑弥呼と同族という意味である。数え年13歳の乙女であった。

すでに述べたとおり、卑弥呼は倭国大乱後の180年ごろ女王となり、247年に死去した。台与とおなじく13歳で即位したとしても、80歳前後の高齢で死去したことになる。年の差からみて、台与の母親であるわけがない。

『古事記』『日本書紀』では天照大神を継いだのは万幡豊秋津師比売命である。

父のタカミムスビとは、孫ほどの年の差があったであろう。

『日本書紀』巻第一の一書第六には、タカミムスビが、「吾が産みし児(こ)、一千五百座(人)」と豪語するくだりがある。

あちこちに妻を持ち、子沢山に恵まれていたことは確かなようである。

## 狗奴国と停戦

こうして、邪馬台国の騒乱は収まった。

狗奴国と邪馬台国との紛争も、帯方郡の塞の曹掾史・張政の強力な調停工作によって終結したにちがいない。

その結果、邪馬台国が筑紫平野の西部を狗奴国に割譲することになった。

筑紫の「祠」——のちの筑紫神社を基準点にした南北の直線で国境——西が肥の国(狗奴国)、東が筑紫の国(邪馬台国)——が定められた。

『筑後国風土記』逸文が伝える筑紫君と肥君立会のもと催された甕依姫(みかよりひめ)による荒ぶる神を鎮めるための祭祀というのは、邪馬台国と狗奴国の停戦合意の記憶が神話化して伝えられたものということになろうか。

とすれば、古田武彦氏の「甕依媛=卑弥呼」説よりも、「甕依媛=台与」説のほうに説得力があるかもしれない。——と、いいたいところであるが、いずれにしる単なる思いつきという点では、筆者もまたおなじ穴のムジナである。

## 台与による使節団の派遣

『魏志倭人伝』は、十三歳の台与が即位したことを述べた直後に、

「(張)政等、檄を以て台与に告諭す」

と書いている。

これは、どうみても、帯方郡の下級官吏たる張政が、新しい女王を見下して説教を垂れている光景である。

報告書のなかで誇張した可能性もないではないが、いずれにしても、中華思想に基づく蛮族蔑視の本音が吐露されている記事である。

それに対して、邪馬台国側がどのような反応をしたのかはわからないが、面従腹背は万国共通の対応のひとつである。

新女王の台与は、張政らを帯方郡まで送り届けるための使節団を編成したことを告げるとともに、帯方郡到着後は都の洛陽に派遣したいと要望した。

台与および難升米らは、卑弥呼が魏の洛陽に使者を派遣し、莫大な答礼品をせしめたことを知っている。

張政を無事に帯方郡に送り届けるという口実のもと、帯方郡からそのまま魏の都洛陽まで行けば、魏の皇帝から新女王への莫大な返礼品が期待できる。

もちろん、難升米=タカミムスビの入れ知恵であることは、いうまでもなからう。

ただし、『古事記』『日本書紀』には、外交関係記事がいっさい記されていない。

魏を宗主国とする冊封体制についての認識が、邪馬台国側に希薄であったのかもしれない。言い換えれば、邪馬台国は自国の利益を最重点に打算的に行動しているともいえる。

『魏志倭人伝』は、

「台与、倭の大夫率善中郎将掖邪狗(ややこ)等二十人を遣わし、(張)政等を送りて(帯

方郡に還(かえ)らしむ。(倭の使者は)因(よ)りて台(都の洛陽)に詣(いた)り、男女の生口三十人を献上し、白珠(真珠)五千、孔青大句珠(ヒスイの勾玉)二枚、異文の雜錦二十四を貢ぐ」

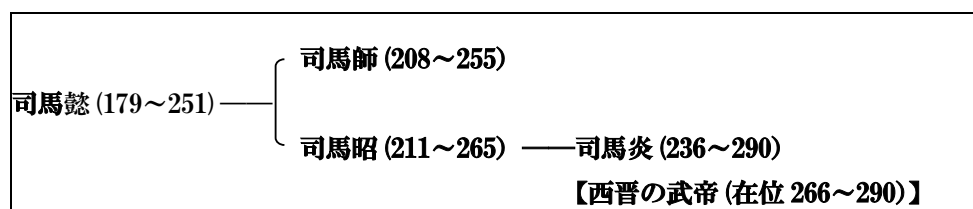
と書いている。

大夫として使節団を率いるのは掖邪狗である。

正始四年(243)12月に卑弥呼が洛陽に派遣した使節団の副使として参加した人物であった。そのとき中国側から、率善中郎将に任命され、銀印を授けられたことはすでに述べた。

### 司馬懿によるクーデター

台与が邪馬台国の女王となった正始九年(248)秋の時点で、70歳になった魏の司馬懿(仲達)は依然として健在であった。すでに述べたとおり、皇帝は曹芳(在位 239~254)である。



この当時、司馬懿の長男の司馬師は41歳、次男の司馬昭は38歳、魏を滅ぼし西晋の初代皇帝となる孫の司馬炎は、台与とおなじ13歳となっている。

司馬懿を頂点に、司馬一族は優秀な子と孫に恵まれ結束を強めていたが、政敵ともいえる曹爽(そうそう)一派から執拗な嫌がらせを受け続けた。

やむなく、司馬懿は老齢を理由に屋敷に引きこもってしまった。そこへ、曹爽一派の李勝(りしょう・?~249)が荊州への赴任あいさつと称して、司馬懿の見舞いにやってきた。

李勝と対面した司馬懿は、李勝の言葉をわざと聞き間違えたり、薬を飲むときにダラダラと口からこぼすなどボケた姿を見せつけた。

李勝の報告を聞いた曹爽は、大笑いして司馬懿への警戒心を解いてしまった。

司馬懿がクーデターを起こしたのは、249年(正始十)1月6日のことである。

曹爽・曹羲(そうぎ)兄弟はじめ曹一族が、皇帝曹芳に随行して第二代明帝(曹叡)の高平陵(河南省汝陽県)参詣のため、洛陽を離れたチャンスを狙って決行した。高平陵は洛陽の南、50キロのところにある。

司馬懿は明帝の皇后であった郭太后から、曹爽と曹羲はじめ曹一族の官職を解任する命令を得るとともに、息子の司馬師と弟の司馬孚(ふ)に宮城を制圧させ、曹操に仕えた老臣の高柔と王観に命じて、洛陽内の曹爽・曹羲の陣営を制圧させ、首都洛陽を支配下に置いた。

司馬懿は長年親交のあった蔣濟(しょうさい)とともに洛水の岸辺に布陣して曹爽を待ち受け、「命は保証する。免官するだけだ」と曹爽とも親しい蔣濟にいわせて、戦わずして降伏させた(高平陵の変)。

司馬懿は、曹爽およびその一族を厳しい監視下に置いた。

そして、1月10日に至り、曹爽らに国家転覆の企ての確証を得たとして、本人および三族(父母・妻子・兄弟姉妹)を処刑し、曹爽の腹心であった何晏(かあん)・桓範(かんはん)らの一族も皆殺しにした。

要するに、魏の王朝内において、司馬一族が権力を奪取したのが、249年(正始十)1月のことであった。

### 絶好のタイミングに恵まれた台与の使節団

邪馬台国の新しい女王となった台与が張政らを帯方郡に送り届けたのが、248年(正始九)の秋10月ごろとして、11月に帯方郡を出発した大夫・率善中郎将の掖邪狗(ややこ)ら20名の使節団が洛陽に到着したのは、6か月後の249年(正始十)の4月ごろとみられる。

ちなみに、4月8日に魏の元号が「正始」から「嘉平」に改められている。

『魏志倭人伝』には、洛陽到着の年月日については記載されていないが、倭国の使者たちは「因(よ)りて台に詣(いた)り」と書かれ、「台」には高い建物から転じた「中央政府」という意味もある(藤堂明保編『漢和大辞典』学習研究社)から、都の洛陽を訪れたことは明らかである。

正始から嘉平に改元されたのが4月8日であったので、改元直後の祝祭期間中であった可能性もある。いずれにしろ、絶好のタイミングであったといえる。

### 「邪馬台国」の使者の派遣状況

卑弥呼の時代		景初二年(238)	・9月司馬懿が遼東の公孫氏を討伐
	第一回目	景初三年(239)	・1月1日魏の曹叡(明帝)崩御・曹芳即位 ・1~6月ごろ帯方郡太守が劉昕から劉夏に交替 ・6月卑弥呼の使節団が帯方郡に到着 ・12月卑弥呼の使節団が洛陽に到着・新皇帝曹芳に拝謁
		正始元年(240)	・1月ごろ卑弥呼の使節団が洛陽出発 ・2~4月ごろ帯方郡太守が劉夏から弓遵に交替 ・6月ごろ卑弥呼の使節団が帯方郡に帰着 ・7月ごろ帯方郡の使者とともに九州に到着
		正始四年(243)	・5月ごろ卑弥呼の使節団が九州を出発 ・6月ごろ帯方郡を出発 ・12月洛陽に到着
	第二回目	正始五年(244)	・6月ごろ卑弥呼の使節団が帯方郡に帰着 ・7月ごろ九州に到着
		正始八年(247)	・正月王頎が帯方郡太守に着任 ・1月卑弥呼が載斯(さし)・烏越(あお)を帯方郡に派遣し、狗奴国と武力争乱になったことを報告。 ・1月帯方郡は塞の曹掾史の張政らを倭国に派遣 ・2月1日(日食)に卑弥呼死去か。

台与の時代	第四回目	正始九年(248)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・248年9月5日(日食)男王追放か。</li> <li>・9月ごろ台与が邪馬台国の女王となる。</li> <li>・10月ごろ台与の使節団が張政らを送って帯方郡へ出発</li> <li>・11月ごろ帯方郡を出発</li> </ul>
		正始十年(249) 嘉平元年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月司馬懿のクーデター</li> <li>・4月8日に正始から嘉平に改元</li> <li>・4月ごろ台与の使節団が洛陽到着</li> <li>・10月ごろ帯方郡に帰着</li> <li>・11月ごろ九州に帰着</li> </ul>

「邪馬台国」の使者とそれに対する魏の対応

時代	卑弥呼の時代		台与の時代
回数	第一回	第二回	第三回
洛陽到着時期	景初三年(239)12月	正始四年(243)12月	正始十年(249)4月ごろ
使者	大夫・難升米 副使・都市牛利  計2人	大夫・伊声耆 副使・掖邪狗 随員・6人  計8人	大夫・率善中郎将掖邪狗 随員  計20人
中国の処遇	難升米は率善中郎将の銀印青綬 都市牛利は率善校尉の銀印青綬	8人へ率善中郎将の印綬	不明
日本の献上品	男生口四人・女生口六人 斑布二匹二丈(24m)	生口 倭錦・絳青縑・帛布・丹木 拊短弓・矢	男女の生口三十人 白珠(真珠)五千(5,000個) 孔青大句珠(ヒスイの勾玉)二枚・異文の雑錦二十匹(192m)
中国の返礼品	親魏倭王の金印紫綬 紺地句文錦三匹(28.8m) 細班華罽五張(5枚) 白絹五十匹(480m) 金八両(111.5g) 五尺刀二口(120.5cm) 銅鏡百枚(後漢鏡・魏鏡) 真珠五十斤(約11kg) 鉛丹五十斤(約11kg)	『魏志倭人伝』に記されていない。	『魏志倭人伝』に記されていない。
	倭国へ	絳地交龍錦五匹(48m) 絳地縹粟罽十張(10枚) 倩絳五十匹(480m) 紺青五十匹(480m)	

(参考)

「奴国」の使者とそれに対する後漢の対応(『後漢書』)

時期	使者	奴国から	後漢から
建武中元二年 (西暦57)	大夫	記載なし	印綬 志賀島出土の「漢委奴国王」の金印
永初元年 (西暦107)	倭国王・師升など	生口百六十人	記載なし

中国から邪馬台国への返礼品が第二回と第三回について記載されていないが、これは王朝内の記録には残されていたものの、国史にいちいち記載するほどの重要事項ではないと判断されたためであろう。

陳寿(233~297)によって『三国志』が書かれたのは、司馬氏が皇帝となった西晋の時代の290年ごろである。

司馬懿が遼東の公孫氏を滅ぼした結果として、海の向こうから邪馬台国の女王が朝貢することができるようになった。そういう観点から、卑弥呼の使者に授与された品々については例外的に詳細に書き記されたのであろうが、第二回、第三回については、通例に従って返礼の品々については省かれたのであろう。

だからといって、中国からの返礼品がなかったということではない。

むしろ、第一回目と同程度の返礼品が授与されているはずである。中国は前例主義の国でもある。

とりわけ、台与がはじめて朝貢した正始十年(249)の第三回の使節団は、卑弥呼没後に即位した新女王はじめての使節団であり、受け入れる側は権力奪取したばかりの司馬一族である。

卑弥呼は遼東半島を制圧した直後に朝貢し、台与は魏王朝を奪取した直後に朝貢してきた。

司馬一族が台与の使節団に対して、卑弥呼の使節団に勝るとも劣らない破格の対応をした可能性は十分に考えられる。

日田出土とされる金銀錯嵌珠龍文鉄鏡が魏から授与されたのは、このときではなかったのか——との思いがさらに強くなる。

下表のとおり、日田の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡は直径は約9寸(21.3cm)で貴人・公主クラスである。貴人は皇帝の妃で、公主は皇帝の娘のことである。

しかしながら、金と銀の象嵌に着目すれば、銀以上金以下のクラスともいえる。

トルコ石など宝石の象嵌に着目すれば、世界随一の破格の鏡である。

#### 『曹操集約注』などによる鉄鏡の区分

クラス	鏡の種類	直径		備考
皇帝	金錯鉄鏡	1尺2寸	28.9cm	
貴人・公主	銀錯鉄鏡	9寸	21.7cm	日田の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡 21.3cm
皇后・皇太子	鉄鏡	7寸	16.8cm	

新女王台与の即位を祝う品として、これ以上のものはない。

しかも、豊後の日田から出土している。

筑紫平野の東端に位置するが、豊の国に属する。豊=台与(とよ)である。

やはり、金銀錯嵌珠龍文鉄鏡は魏の皇帝から台与に対して授与された特別の鏡ではない



のか。

### 台与の西晋への最後の朝貢

実は、台与はもう一度中国に使節団を派遣している。

『晋書』の「武帝(司馬炎)紀」の泰始二年(266)の条に、

「十一月己卯、倭人來たりて方物を獻ず」

とあり、『晋書』の「四夷伝」にも、

「宣帝(司馬懿)の公孫氏を平らぐや、其の女王使を遣(つかわ)して帶方に至りて朝見し、其の後貢聘(こうへい)絶えず。文帝(司馬昭)相(相国)と作(な)るに及び、又数々至る。泰始の初(はじめ)に、使を遣(つかわ)して訳を重ねて入貢す」

とあり、さらには『日本書紀』神功皇后紀のなかに晋の「起居注」が引用され、

「晋の武帝の泰初(始)二年(266年)十月に倭の女王、訳を重ねて貢獻せしむ」

とある。

「起居注」とは、皇帝の起居・言動を記した側近による日常の記録である。

咸熙2年(265)5月、司馬炎は父の晋王司馬昭から後継者に指名された。

そして、直後の8月に司馬昭が没すると、司馬炎は晋王・相国の位を継ぎ、12月には、配下の賈充(かじゅう・217~282)、裴秀(はいしゅう・224~271)、王沈(おうしん・?~266)、羊祜(ようこ・221~278)、荀勗(じゅんきょく・?~289)、石苞(せきほう・?~272)、陳騫(ちんけん・201~281)らと計って、魏の元帝(曹奐・246~302)——この当時20歳——に禪譲を迫って皇帝の位を奪い、新王朝を「晋」と名づけ、みずから皇帝の座につき、元号を「泰始」と改めた。

泰始元年(265)12月14日、司馬炎30歳のときである。

邪馬台国の台与が使節団を派遣したのは、その翌年の泰始二年(266)10月ないし11月のことである。

使者の名も人数も記されていない。

台与が貢物を献上したことは明らかであろうが、『晋書』は「方物」と書くのみで、その内容も不明である。

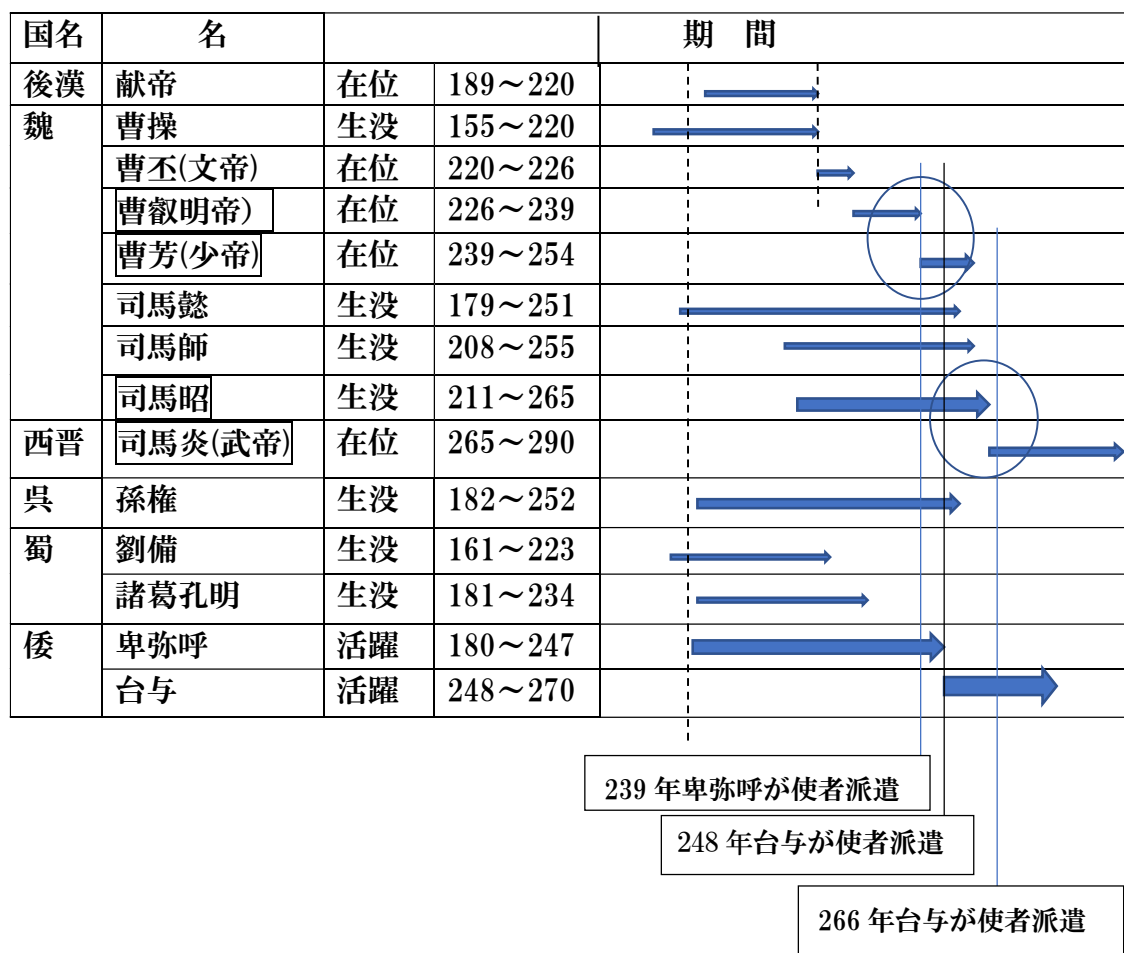
【生口+特産品】の組み合わせであったことは、過去の例からしてまちがいなからう。

中国側からの土産品についても、これまた何も記されていないが、先例に準じた品々であったろう。もちろん、そのなかの一品として、日田出土の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡が授与された可能性もあり得る。

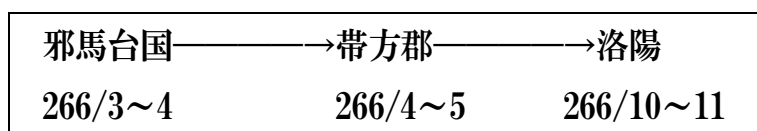
前述のとおり、筆者は現段階においては、正始十年(249)の派遣時に授与された説に傾いているが、卑弥呼が派遣した正始四年(243)の派遣と今回の泰始二年(266)の派遣についても、その可能性はあり得ると考えている。

正始十年(249)に傾いているのは、新女王への就任祝いという面を重視しているからである。

いずれにしる、台与の外交手腕については、卑弥呼とおなじくきわめてタイムリーな対応と評価すべきであろう。



泰始元年(265)12月14日の司馬炎の西晋建国と皇帝即位から、泰始二年(266)10月ないし11月に台与の使者の洛陽到着までの期間は、わずか10～11か月にすぎない。帯方郡から洛陽まで陸路で片道6か月かかる。邪馬台国から帯方郡まで10数日とみて、帯方郡との調整を2月ごろまでに終えないと、3月ないし4月に使節団を派遣できないのである。



帯方郡が西晋の建国と司馬炎の即位の情報をキャッチしたとみられる1月ごろ、それとほぼ同時期に邪馬台国もその情報をキャッチしているとはしかおもえない。

そして、ただちに帯方郡と調整を行い、3～4月には使節団を派遣している。超スピード

の対応である。帯方郡のなかに邪馬台国の連絡員を常駐していた可能性すら考えられる。

そしてまた、248年に女王に即位した台与が266年に西晋に使節団を派遣したということは、まちがいなく266年まで邪馬台国が存続していたということである。

そして、この記事 最後に、台与および邪馬台国に関する情報が中国文献から途絶えてしまう。

西晋に使節を派遣した直後に邪馬台国が滅びたわけはなからうから、最低でも270年ごろまでは存続していたはずである。

ということは、倭国大乱後に卑弥呼が女王となった180年ごろから270年ごろまでの約90年間は、邪馬台国の時代ということになる。

中国文献の知識が乏しいがゆえの過誤なのか、弥生時代あるいは邪馬台国時代の終期を西暦250年ごろで区切る考古学者をみかけることがあるが、最低でも270年ごろまでは存続していたとみるべきである。

神武東遷を280年代とすれば、むしろ邪馬台国問題の本質は、西暦250から280年までの30年間のなかに隠されている。

(一) 出雲の国譲り

(二) 日向への天孫降臨

(三) ニギハヤヒの東遷

という日本の古代神話が伝える高天原勢力の拡大ともいえる事件は、台与を女王とする時代における事件と考えるからである。そして、

(四) 神武東遷と大和朝廷の成立

というのは、(一)～(三)の最終段階である。

280年代における九州の勢力による新しい統一王朝の実現である。

神武東遷という観点からみれば、大和朝廷は邪馬台国の後継勢力である。「ヤマタイ」と「ヤマト」の類似も当然のことである。

### 台与と万幡豊秋津師比売

とはいえ、台与自身に関する情報はきわめて乏しい。

もし、卑弥呼＝天照大神であるならば、台与＝万幡豊秋津師比売ということになる。

台与の乏しい情報を万幡豊秋津師比売の情報で補うことができる。

中国側の情報と日本側の情報を卑弥呼から台与、天照大神から万幡豊秋津師比売へと拡大し、より多くの項目で比較検討することが可能となる。

卑弥呼と天照大神の二人は、これまで述べたとおり同一人物とみてほとんど矛盾がないが、台与と万幡豊秋津師比売の関係についてはどうであろうか。

『魏志倭人伝』の「卑弥呼と台与」と『古事記』『日本書紀』の「天照大神と万幡豊秋津師比売」の情報を比べると次のようになる。

「卑弥呼・台与」と「天照大神・万幡豊秋津師比売」の比較

名	『魏志倭人伝』		『古事記』『日本書紀』	
	卑弥呼	台与	天照大神	万幡豊秋津師比売
即位	180 年ごろ	248 年	不明	天の岩戸後
生年	記載なし	236 年	不明	不明
没年	247 年ごろ	記載なし	天の岩戸(日食)	不明
係累	記載なし	卑弥呼の宗女	天孫族	天孫族
地位	女王	女王(13 歳で)	女神	天照大神の息子の嫁
国名	邪馬台国	邪馬台国	高天原	高天原
父母	記載なし	記載なし	父・イザナギ 母・不明	父・タカミムスビ 母・不明
弟	男弟(名は不明)	記載なし	月読命・スサノオ	思金命ほか多数
結婚	夫婿なし	記載なし	夫婿なし	天忍穂耳命
子	不明	記載なし	天忍穂耳命ほか	ニギノミコト ニギハヤヒ
鬼道	事(つかえ)る	記載なし	巫女	巫女
墓	径 100 歩	記載なし	天の岩戸?	不明
計 13	計 9	計 6	計 11	計 10

台与と万幡豊秋津師比売だけを取り出して比較すると、次のとおりとなる。

台与と万幡豊秋津師比売の比較

項目	『魏志倭人伝』	『古事記』『日本書紀』	判定
名	台与	万幡豊秋津師比売	○台=豊
即位	248 年(日食)	天の岩戸後(日食か)	○
生	236 年	不明	-
没年	記載なし	不明	○二人とも不明
係累	卑弥呼の宗女	天孫族	○
地位	女王(13 歳で)	天照大神の息子の嫁	△母系制社会では女王か
国名	邪馬台国 (邪馬=山)	高天原 (高地=山)	○山ないし丘陵地
父母	記載なし	父・タカミムスビ 母・不明	-
弟	記載なし	思金命ほか多数	-
結婚	記載なし	天忍穂耳命	-
子	記載なし	ニギノミコト ニギハヤヒ	-
鬼道	記載なし	巫女	-
墓	記載なし	不明	-
計 13	計 6	計 10	計 6

台与に関する情報は少ないにもかかわらず、万幡豊秋津師比売との一致率が高い。

最も奇妙なことは、二人とも最終的にどうなったのか、いつごろ、どういう状況で没し

たのかという情報が皆無であることである。

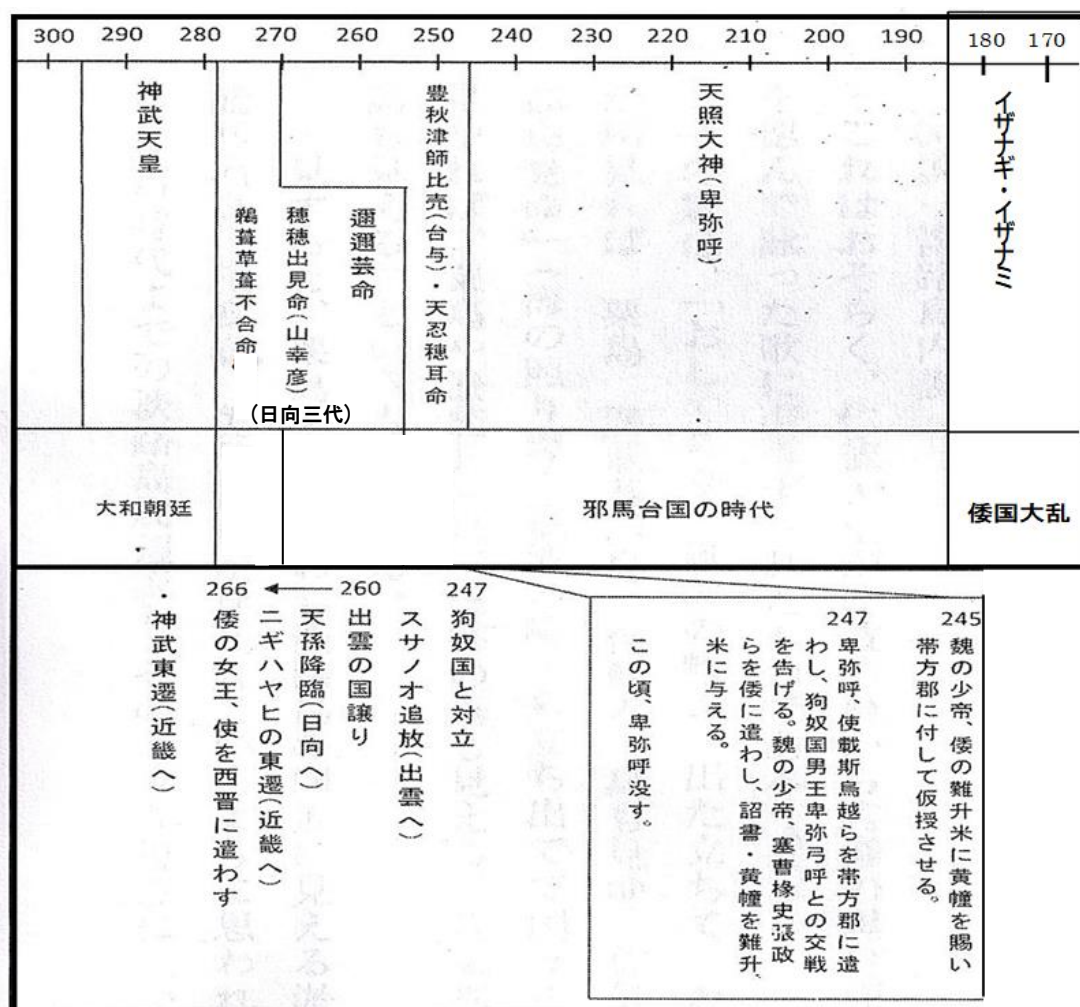
卑弥呼は247年ごろ狗奴国との争乱の最中に死没し、天照大神は日食とおもわれる天の岩戸において隠れた。

台与と万幡豊秋津師比売には、そのような終末に関する記事・伝承が完全に欠落している。

そういえば、万幡豊秋津師比売の父のタカミスビと夫の天忍穗耳命についても、最終的にどうなったのかに関する情報がまったく残されていない。

台与ないし万幡豊秋津師比売、天忍穗耳命、タカミスビの三人は、最終的に一体どうなったのか。

このことを念頭に置きながら、次回から万幡豊秋津師比売のことについて述べることとするが、大局的なシナリオは、これまでどおり、次の年表に沿って進行する。



(以下、次号へつづく)

## 河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ  
九州大学法学部卒  
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長  
福岡県文化団体連合会顧問  
ふくおかアジア文化塾代表  
立花壱岐研究会会員  
元『季刊邪馬台国』編纂委員長  
西日本新聞 TNC 文化サークル講師  
朝日カルチャーセンター講師  
大野城市山城塾講師



### 〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)  
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)  
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)  
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)  
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)  
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)  
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)  
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)  
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)  
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)  
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)  
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)  
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)  
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)  
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)  
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)  
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)  
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

### (テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」  
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演